



水着おっぱい倫理観★試し読み

意馬心猿

【登場人物】

主人公…シイア♀

明るい茶髪、水色の瞳。

柔らかい豊満な乳房、顔は可愛い系、ちよつと緩い頭をしている。経験済み。
家の配達箱に割りの良い求人広告が入っていて深く考えず応募した。

一人称、私。

お相手1…フアヨン♂

黒髪、緑色の瞳、片側は術式道具の義眼と眼帯（一次的に映像を補完し録画玉に移す機能を持つ）、美形、漂う色男。情報収集が得意。気に入った獲物を手籠めにする悪い男。優しい風な屑。おっぱいが大好き。タストの親戚。現在、他国から視察に来ている。

一人称、僕。

お相手2…タスト♂

朱色の髪、緑色の瞳。小麦色の肌、特殊な術が組まれた刺青が腕から背中に入っている。知識だけある童貞。ファフンの親戚。孔雀学舎に通う為に他国から来た。血筋なのか見た目は一部違うが好みが似ている。シィアに一目惚れ。一人称、俺。

リンス（円）

大学舎の合間に臨時の仕事をして夏に向けての費用を貯めたいと思っていた、シイアは水着試供の仕事に行くことになった。

『試供品の調査に時給四千リンス・試験一個に付き三千リンス・気に入った水着を一着お渡し！』そんな夏前の求人広告に釣られてやってきた、シイアは、片目に眼帯を着けた男を見上げて硬直する。

——……か、顔がいい……

片目は術式道具義眼をしているらしいが、とんでもない美形に、どきどきする。寧ろ蒼い上等な布上に金色の術式が組まれた眼帯が素敵だ。色男に、どきどきしながら番号が付いた水着が入った袋を渡される。更衣室で自分程度が水

着姿を晒す事に羞恥を覚えながらも一番目の水着に着替える事にした。

シャツとタンクトップを脱げば、シィアの豊満な胸がボロンッと飛び出る。募集では豊満な女子大学舎とあり丁度適していた項目に、シィアは飛び付いた。ちよつと世間知らずの気がある彼女は、この募集を怪しいとは思っておらず。誰かに相談したわけでもないのに、シィアは、ブラジャーを外し、いそいそと着替えたのだった。

最初の水着はワンピース型のヒラヒラした白と水色の色合いで可愛らしい水着だった。シィアは、これ欲しいなっと思ひ。最後に貰える水着はこれにしようかと最初の段階で思ったが、まだまだ試着はあるのだ、もつとお気に入りが出るかもしれない。水着への印象を答えた後は性能を調べるので背中側から指先を入れて引つ張られたり一部に水を滲ませて、どんな感じかを答えた。りする。

「肌触りも柄も良くて、お腹も隠れるし気に入りました」

「お腹、隠れる方が好みなのかい？」

「はい。やっぱり、ちよつと恥ずかしいですし」

「なるほどねえ」

ファアンと名乗る彼は話しやすく。彼の助手という隅で録画玉や機械に黙々と記録を取っている男の子は寡黙だ。小麦に焼けた肌にはカツコ良さげな入れ墨があり年の頃は高学舎ぐらいに見える。目が合つた際には会釈をしてくれたので悪い子では無いだろう。

「じゃあ次の水着に着替えてきます」

「うん。よろしく」

それから五着程、水着に着替えて段々と布面積が少なくなっていくのに、どきどきはしたが試験内容も慣れてしまつて、それよりも五着という事は現時点で一万五千リンスという金額が入ると邪推し気分が乗っていた。

「じゃあ、もう少ししたら、お昼だし一度、休憩にしようか食べたいものある？」

あ、もちろん無料ね。飲物も別で出すから選んで」

料理の名前が載った品表を渡される。何だか洒落た喫茶みたいだと思いつつ季節の夏野菜麺定食と柑橘の飲み物にした。

「タストは、どうする？」

「昨日の余りの煮込みに肉団子とチーズ付けて大盛りにしてくれ。飲物は同じで」

「はいよ」

タストという少年が初めて喋り驚きつつ昨日のつと言う言葉で二人は仲の良いきり合いだという事がわかったしファランが料理を作る事にも驚いて部屋を後にする後ろ姿を、ぼんやり眺めた。

「ほら」

薄めの毛布を渡された。冷房の効いている部屋は動いていれば良いが、じつとしていれば寒くなってくる。ありがたく受け取り、布張りの長椅子に座れば

彼は一つ分開けて同じ長椅子に座った。

「……これ、倒すと寝台になるんだ」

「あ、そうなんです。初めて見た……高そう」

触り心地の良い高そうな長椅子と違っていれば、そうなのかと感心する。

「偶に泊まりに来る奴が勝手に買って、ここに置いていったらしい」

「ほうほう……あの」

「なに？」

タストの視線が向いた。

「ここって……もしかして飲食店だったりします？」

「ああ。ファロンが経営する気まぐれな店だな」

「料理人の気まぐれ料理店……あ、でも水着の……」

「これは副業だ。趣味に近い」

「へ、へゝ！」

色んな仕事が、あるんだなつと、シイアは思った。あと二人になったら寡黙だと思っていたタストが予想外に喋って驚いた。

「タスト君は高学舎ですか？」

「……ああ。孔雀学舎の三年だ」

「あ、四大名門の……じゃあフアンさんは……」

「親戚だ。普段は……あいつは、この地で喫茶店の仕事を偶にしているが今日は臨時休業して、これらしい」

「この水着って……手作りですか？」

「この椅子を置いて行った奴の企業が作ってるらしいな」

「わー凄い！」

「何か気に入ったのは、あったか……？」

「あ、最初のフリルの水着と三番目の短パンの水着で今は迷ってます」

「そうか……あんた、あいつの好みだろうし愛想をもっと増やしたら二着でも

何着でも持って帰って良いって言うと思うぞ」

「へ……？ い、いえ、そこまで鋼の心は……」

好みとは、お世辞や社交辞令でも、どきんつとする。

「別に良いんじゃないか。普通じゃ、こんなのやらないだろうし少しぐらい多くもらおうが」

「ふはっ、うん。ありがとう。気持ちの隅に置いておくね」

「まあ……無理にとは言わないけど」

「あはは。んゝタスト君は何か部活してるの？」

「俺は記録武術をしている」

「それって情報機密を取るっていう？」

「そう」

「名門は部活が将来の粹取りになるのか……」

「今は戦争は無いけどな」

「無い方が良いね」

「……ああ」

タストは少し視線を彷徨わして呟く。

「ファヨンも……昔していた」

「ああ……機密情報取ってきそう」

「……女は、やっぱり、ああいうのが好みなのか？」

「え？ あー人気そうだよねファヨンさん」

「……あんたの好みではない？」

「へ、わ、私です？ 平凡な私の好みなんぞ……あ、でも高い靴はいても自分

よりは背が高い人が良いなあ」

「そうか……なあ」

「はい」

「連絡先、交換しても良いか？」

「……は、はい……えーっと」

携帯は着替えの部屋の鞆の中にある。

「電話番号は履歴書で知ってるから、電子通信送って良いか？　後で返してくれ」

「あ、うん！」

そう、ぽつぽつと話していれば配膳台車に料理を置いて持ってきたファヨンが部屋に入ってきた。季節の麺や煮込みの大盛りや卵料理が見える。ファヨンは卵料理を食べるようだ。

「三人共に肉団子付けたよ。シイアちゃん食べきれなかったら僕かタストが食べるから」

「え、嫌じゃないです？」

「可愛い子の残りがもらえるとか最高だよ」

「オヤジ臭いぞファヨン」

「えっ、これ、そうなるの？」

「なる」

「わあ……ごめんね、シイアちゃん」

「あはは。いえ、全然。ありがとうございます」

「んー良い子」

フアランが自然な流れで、シイアの頭を撫でてタストが言う。

「早く食うぞ」

「はーい」

フアランが小樽で持ってきた氷入りの柑橘の飲物をコップに注いで三人は『いただきます』っと手を合わせた。

シイアは少し暑いなと思った。冷房の温度は同じなのに不思議だ。使い捨ての歯磨きを貰い歯磨きをして一度お手洗いに行く。下の水着側をスルスルと脱いで尿を出す。シイアは自分のお腹を触って食べて少し出たかなと、そわわとした。洗浄で綺麗にして丁寧に拭いて出る。水着に汚れが付いたらいけない。「じゃあ、あと二着だけど、ここからは布生地 of 耐久力をはかるものだから見た目は素朴だよ」

「わかりました」

後ろや腰を紐で縛る白水着を着て部屋に戻れば長椅子に座り後ろを向かされて背中の紐を解かれる。簡単に解けた紐を今度はキツく結ばれ。解くよう促された。

「……んっ、かたいっ」

背中側に手を回して解こうとするが固くて解けない。

「結び過ぎると反対に解けないかあ。でも解けやすくて駄目だから何か違う留め具が居るかな」

「あ、でも回せば取れると思いますよ」

「回す？」

「えっと、こうして……」

背中をファヨンやタストに向けたまま、肩紐を横にして一度下ろすと前と後ろをクルンと回し紐側を乳房下になると固い縛りを解いて着け直した。

「こんな感じですね。でもホックやボタンとかの方が良いかもしれませんね」
「……なるほどね。じゃあ次は日焼け止めクリームを全身に塗ってから飛び跳ねてもらおう実験に入るね」

「はい」

噂の長椅子を倒し寝台にすると横になるよう促された。また紐を解かれてうつ伏せになった、シアの背中に跨がったファヨンが液体を塗っていく。

「ちなみに今塗ってるのは日焼け止めクリーム代わりの、しっとり系な美容香油だよ」

「へー良い香りしますね」

「これ売れ筋なんだ。試供品、余ってるし帰りに持たせてあげる」

「良いんですか？ やったー！」

後ろ全体を塗り終わるとファランは背後から手を回してお腹を塗り始める。

「……ん、今さらですけど自分で塗れますよ」

「いやいや。これは恋人が塗っている設定だから……濡れにくいと困るしね」

「そうなんですネ……ふっ」

「ここも失礼するねー」

「あ、う……」

鎖骨から乳房にファランの手が動いたかと思うと谷間に、ぬぷりと入り込む。

「ひゃっ」

「全体に塗るよ」

谷間から出た大きな手の平は横の輪郭をなぞり下側から乳房を押し込むように上がる。

「……えつと、あの」

「それじゃあ、こつちを塗って」

そういつて言つてフアフンの手の平は、シイアの腰を両側からなぞり下の紐をすり抜けて尻を掴むように揉む。揉みながら押し込み塗っているようだ。

「マッサージもかねてるんだけど、どう？ 気持ちいい？」

「……あ、き、気持ちいです」

「そう？ 良かった」

優しいな声色が落ちてきたかと思うと尻の間を指が香油と共になぞった。

「そ、こ……っ」

「少し上げるね」

「わっ」

ファランの筋肉質な腕によつて後ろから持ち上げられ水着は寝台に置き去りにされる。背を向けてはいるが裸のまま、寝台の上でファランの正座した腰上に乗った、シイアは戸惑いの表情を浮かべた。

「ん、これで塗れるね」

両手で乳房を持ち上げられ手の平で、むにゆりと香油を押し付けるように塗られてしまう。シイアは、どうしたら良いのか分からず無言になり自分の変わつていく乳房の形を啞然と見つめた。その際に何度も滑つては敏感な先っぽに触れる指先に、シイアの身は、びくびくと震えた。

「だ、め……っ」

シイアの身が朱くなりファランの手の平に上から掴んで止める。

「も、もう……ぬれました……」

「本当？ 塗り残さないかな？」

「だ、いじよ……」

「あ、こつちがあつたね」

そう言つてファヲンの片手は下に向き、にゆるりと股の間を撫でた。

「ひっ」

「あれ？ 濡れてる……香油が垂れたのかな？」

にち、にち。ぬち。

密度の高い場所で液体が摩擦する音が部屋に小さく響いた。

「そ、それあ……ふあっ」

指平二本が割れ目の中の敏感な膨らみを押し、くりくりと円をかいて周った。

「あ、あ……」

乳房に残っているファヲンの片手の平は先つぽを指先二本で挟みスリスリと

動いている。

「ま、まって……だ、め、ふあ、ヨン……っ、さ……んあ♡」

「ん、シィアちゃん。なーに？」

背中側で密着しているファヨンの身が少し下がり、シィアの耳元で、そう囁いた。耳にかかる息に、シィアは、ぞくぞくとするものを感じ他の敏感な部分の刺激と共に甘く声をもらして、びくびくっと太股の筋肉が収縮したのだった。

続きは本編で！

水着おっぱい倫理観★試し読み

発行日 2021 年 6 月 12 日

著者 意馬心猿

<https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
